

タイトル	カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響：江東区とサレー市のケースについて
著者	井上，真蔵
引用	北海学園大学人文論集，26・27：43-97
発行日	2004-03-31

カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響

— 江東区とサレー市のケースについて¹ —

井上真蔵

現在、カナダの都市と姉妹都市（および友好都市）関係にある日本の自治体数は75件である。そのうちの27件を北海道が占めている。その次に多いのが、首都圏周辺である。神奈川県が5件、東京都が3件、茨城県が4件、千葉県が1件、埼玉県が1件で、合計14件となる²。

北海道とカナダとの姉妹都市に関しては、上記のように1/3強を占め、自然・気候も似ている上に、アルバータ州と姉妹提携関係にある北海道庁の支援もあり、各自治体は非常に活発な活動を行いカナダの自治体との間に緊密な関係が見られる。ところが、提携数を見れば、地理的にも気候面でも異なる首都圏およびその周辺において、カナダと姉妹提携にある自治体の数は北海道の約半数にのぼっている。

それでは、首都圏および首都圏周辺におけるカナダとの姉妹都市関係は、どのような状態なのだろうか、という一般的な疑問が湧いてくる。本稿では、それらの中から、東京都江東区とブリティッシュ・コロンビア州のサレー市との関係を取り上げてみたい。筆者も驚いたのであるが、この江東区とサレー市との姉妹都市関係は、一瞥しただけでは分からないが一般的な姉妹都市関係とはかなり異なっているようである。そして、割りと調査の初期段階で、従来のタイプからは外れてはいるが、新しいモデルになりうる

1 本稿は、北海学園大学人文学部英米文化学科の共同研究（2002年度）の一環として行われたものである。

2 カナダ大使館ホームページ、「カナダ・日本姉妹都市リスト」http://www.canadanet.or.jp/p_c/sistercity.shtml.

のではないかと、という感触が得られたからである。

本稿は、この江東区とサレー市との関係に関して、次のような基本的な疑問に答えようとするものである。江東区役所が、1)「なぜ、どのようにしてカナダの特定の自治体と姉妹都市関係を結ぶようになったのか」、2)「どのような活動を行っているのだろうか」、3)「どこの部署がどのように担当しているのだろうか」、そして4)「姉妹都市関係の活動を通じてどのような影響が生まれているのだろうか」。

近頃ではインターネットのおかげで、かなりの情報がコンピュータの前に座って瞬時に得ることが出来る。本稿の資料に関してもインターネットの利用はしているが、やはり具体的な事実や微妙な点に関しては、現場で実際に携わってきた関係者の方々からの情報は欠かすことができないものである。従って、本稿の資料の大半は、該当する自治体や関連組織の関係者をお訪ねしてインタビューをおこなって得られたものである。

以下の方々には、インタビューのために貴重な時間を割いていただき、現場で体験した人しか得られない情報を提供していただきました。ここに感謝の意をこめてお礼申し上げます。

- ・江東区役所：区民部地域振興課区民交流係 角田宏之；2002年12月10日インタビュー
- ・江東区教育委員会：学校教育課指導室指導主事 貝塚一石；2002年12月9日インタビュー
- ・江東区立第三大島小学校：千葉良幸校長，丹後教諭；2002年12月10日インタビュー (以上、敬称は略)

I. 提携の経緯

江東区は、1989年(平成元年)に、ブリティッシュ・コロンビア州のサレー市と姉妹提携を締結した。日本全国では、カナダとの姉妹都市提携37番目である。

江東区の場合は、カナダ大使館が縁結びの役割を果たしている。1983年

1月に、カナダ大使館の協力を得て第1回カナダ展を開催したのが切っ掛けとなっている。翌年の1984年に、サレー市長から姉妹都市提携の親書が届くことになる。以後、種々の検討を重ね、1987年11月には小松江東区長から、カナダB.C.州政府ラッセル・マーク駐日代表を通して、サレー市と交流を進めるための打診を行うのである。1988年には、江東区区長とサレー市長が、それぞれ相互に視察訪問を行い、1989年にはサレー市で正式調印に至る³。

提携の理由としては、「進展する国際化社会の中で、江東区民が言語・習慣・文化の違いを超えて他国民と相互理解を深める」ということが「時代の要請」であると認識し、「国際交流の主要な手法のひとつである姉妹都市提携」を行うに至ったということである。カナダのサレー市が提携相手に選ばれた理由としては、カナダ大使館の仲介の他に、1987年からB.C.州のスコオミッシュ市で「中学生短期留学」が実施され始め交流の気運が高まっていたということと、太平洋岸にあり「人口、産業、その他の類似性」を考慮に入れた結果であるとされている⁴。姉妹都市提携の頃には、木場にはまだ全世界から買い付けた原木を加工する産業が存在しており、それで木材に関してもカナダと関係があったようである⁵。そして、次のような「交

3 江東区役所区民部地域振興課区民交流係「姉妹都市交流の現状」（以下、「交流の現状」と略す）平成14年12月、1ページ。江東区役所区民部地域振興課区民交流係「姉妹都市交流経過一覧」（以下、「交流経過一覧」と略す）、2002年。

4 「交流の現状」1ページ。江東区教育委員会「江東区立中学校生徒海外短期留学——昭和62年度～平成13年度（第15回）実施経過」（以下、「短期留学実施経過」と略す）2002年9月10日。1ページ。担当職員の方は、産業面の類似性について次のように語ってくれた。「産業的な縁と申しますか、こちらも江東区も昔は木の町、まあ木材産業ですね。木場という。木材産業がかなり盛んな町だったんですけども、で、サレーの方も、カナダの方も木ですね、産業という事で、そういう面の縁もあるんじゃないか、ということ。」江東区役所区民部地域振興課区民交流係における角田宏之氏とのインタビュー、2002年12月10日（以下、「江東区役所でのインタビュー」と略す）。

流活動合意事項」が、江東区長とサレー市長との間で、了解されている。

1. 児童・生徒による文通や絵画，写真，工作等作品の交換
2. 中学生のホームステイ交換
3. 一般市民による絵画，写真，彫刻等作品の交換
4. カナダフェアへのサレー市の参加
5. 役所で活用しているコンピュータシステムの交換⁶

II. 交流活動の内容

1. 概要

1989年に姉妹提携締結を行って以来の活動内容は、「江東区・サレー姉妹都市交流経過一覧」⁷の通りである。但し、姉妹都市担当部署の資料「姉妹都市交流経過一覧」には、表の右端の「教育委員会」による「江東区立中学生海外短期留学」に関しては含まれてはいない。教育委員会によるこの種の派遣は、普通は姉妹都市交流活動に含まれるのであるが、その主な理由としては、中学生の派遣先はB. C.州にあるが、姉妹都市提携先のサレー市ではなくてスコオミッシュという町であり、姉妹都市提携とは直接的には関係していない活動であるということであろう。

行政

江東区とサレー市との交流関係は、1989年の提携から1996年までに、江東区の行政側が9回、サレー市の行政側が4回相互訪問している。江東区側は、最初は、3ヶ月の職員研修を1回、1ヶ月の職員研修を2回行うなど、他の自治体には見られないような、かなり意欲的な姿勢が窺えるもの

5 江東区立第三大島小学校における千葉良幸校長、丹後教諭とのインタビュー、2002年12月10日(以下、「第三大島小学校でのインタビュー」と略す)。

6 「交流の現状」, 2ページ。

7 「交流の現状」, 「交流経過一覧」, 「短期留学実施経過」より作成。

カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響（井上）

江東区・サレー姉妹都市交流経過一覧

		行政		地域振興会		民間		教育委員会
1987							7.25 8.4	第1回江東区立中学生海外短期留学(23名, 引率4名), B. C., スクオミッシュにて
1988	10.19 23	江東区長他4名, サレー視察					7.23 8.3	第2回江東区立中学生海外短期留学(35名, 引率6名), B. C., スクオミッシュにて
	2.12 18	サレー市長他4名, 江東区視察						
1989	4.18 23	江東区長・議長他12名, サレー市訪問し提携に調印		江東区文化センター所長, カナダフェア打合せのため, サレー市訪問			7.22 8.3	第3回江東区立中学生海外短期留学(35名, 引率6名), B. C., スクオミッシュにて。サレー市表敬訪問始める
	9.4 8	江東区助役・企画部長, 事業打合せのため, サレー市訪問						
	1.14 18	サレー市長他3名, 江東区を公式訪問						
1990	5.7 -8.8	田中洋三主任主事, 職員派遣研修のためサレー市に行く	12月	江東区文化センター所長, 文化事業打合せのため, サレー市訪問	6.26	カルチャーの会5名, 区長親書持参, サレー市を表敬訪問	7.21 8.2	第4回江東区立中学生海外短期留学(35名, 引率6名), B. C., スクオミッシュにて
	10.17 -22	ジョンソン局長他3名, 事業打ち合わせのため江東区訪問			9.26 -10.2	産業関係者(商工課長・総務係職員随行)8名, サレー市訪問		
1991	10.8 -11.8	高山聡主事, 職員派遣研修のためサレー市に行く		サレー市アートセンター課長, 江東区訪問			7.20 8.1	第5回江東区立中学生海外短期留学(35名, 引率6名), B. C., スクオミッシュにて
	10.22 -28	江東区長・議長他12名, 公式訪問						
1992	4.2 -9	サレー市長他8名, 公式訪問	2月	江東区文化センター副理事長他, 文化事業打合せのため, サレー市訪問		バトリック・アトリー氏, ヨットにて親善訪問, 親書持参	7.25 8.6	第6回江東区立中学生海外短期留学(35名, 引率6名), B. C., スクオミッシュにて
					8.23 -30	江東区青少年吹奏楽団59名, 親善公演		
1993	7.5 9	江東区生活文化課長他2名, 事業打合せのため, サレー市訪問			9.8 -15	江東区工業連合会青年部9名, サレー産業関係者と懇談, 工場見学等	7.23 8.4	第7回江東区立中学生海外短期留学(35名, 引率6名), B. C., スクオミッシュにて
	10.4 11.2	中村保夫主任主事, 職員派遣研修のためサレー市に行く						
	10.19 -25	江東区議長・助役他14名, サレー市を公式訪問						
1994							7.22 8.3	第8回江東区立中学生海外短期留学(39名, 引率6名), B. C., スクオミッシュにて
1995	10.25 31	江東区議長・助役他15名, サレー市を公式訪問					7.22 8.3	第9回江東区立中学生海外短期留学(39名, 引率6名), B. C., スクオミッシュにて
1996	5.12 -17	サレー市長他6名, 江東区を公式訪問					7.20 8.1	第10回江東区立中学生海外短期留学(39名, 引率6名), B. C., スクオミッシュにて
1997							7.19 -7.31	第11回江東区立中学生海外短期留学(38名, 引率6名), B. C., スクオミッシュにて
1998					3.14 22	サリバン小学校(児童16名, 教員2名, 保護者4名), 第三大島小学校児童と交流	7.18 -7.30	第12回江東区立中学生海外短期留学(39名, 引率6名), B. C., スクオミッシュにて

	行政	地域振興会	民間	教育委員会
1999			3.25 -4.2 第三大島小学校(児童18名, 教員1名, 保護者5名), 市長表敬訪問, 鯉織を寄贈	7.24 -8.5 第13回江東区立中学生海外短期留学(39名, 引率6名), B.C., スクオミッシュにて
2000			2.18 -25 サリバン小学校(児童12名, 教員2名, 保護者3名), 児童宅にホームステイ, 区長表敬訪問	7.22 -8.3 第14回江東区立中学生海外短期留学(39名, 引率6名), B.C., スクオミッシュにて
2001				7.21 -8.2 第15回江東区立中学生海外短期留学(39名, 引率6名), B.C., スクオミッシュにて
2002			4.26 江東政経文化懇談会・区議会 有志議員団(産業関係者6名, 区議会議員有志5名), 市長表敬訪問	7.20 -8.1 第16回江東区立中学生海外短期留学(39名, 引率6名), B.C., スクオミッシュにて
			9.27 -10.5 第三大島小学校(児童16名, 教員3名, 保護者3名), サリバン小児童宅にホームステイ	
	中学校生徒海外短期留学(カナダ・スクオミッシュ)の際に, 平成2年(90)からサレー市役所を表敬訪問している	文化センターとサレーアートセンターとの間で, 子供たちの絵画交換展示を3回実施した	* 枝川在住の高橋氏家族, サレー市訪問	
			* 南砂在住 小宮甲子太郎氏, サレー市訪問(94.7-95.1)帰国後, カナダとの交換留学奨学金制度創設(95-01), 平成14年度(02)に, 江東・カナダ交流会創設	
			北砂在住 速見氏, サレー市訪問(95.9-12月ホームステイ)	
			平成8(96)3月から1年間, 第三亀戸中学校3年生30名とサレー市マルサ・ジェーン・ノリス小学校6年生との間で文通を行った	
			平成14年(02)5月から第三砂町中学校とフレーザーヘイツ中学校との間でメール交換が始まる	
			民間のレベルでは, 小宮甲子太郎氏が199年に「小宮カナダBC海外奨学制度」を創り, 2001年度までに, カナダから10名, 江東区から12名の学生が交換留学をした。* 現状 p.3, この制度は2001年度で廃止されたが, 「江東・カナダサレー交流会」を設立し, 「今後は江東区の姉妹都市サレーの人々との交流をベースとして, 両市の友好を進めるための交流活動を行います」とのことである。*(参加団体一覧5)	

であった。しかし, 現在は行き来が途絶えた状況である。担当の方は, 「今は, 儀礼的なやりとりでして…クリスマスの挨拶とか, 人事異動ですね。あと選挙の際に再選されればおめでとうございますとか, こういう結果になりましたとか, そんな具合です」と語っている⁸。行政に準ずるものとし

ては、江東区の文化センター所長と理事が3回サレー市を訪れ、サレー市のアートセンター課長が1回訪れている。さらに、江東区の文化団体や産業関係者などが4回サレー市を訪れている。

平成5年あたりまでは、商工会議所の関係者もサレー市を訪れるなどして、何とか関係を模索する試みが行われたようである。具体的には、姉妹都市提携時には木場に存在していた木材加工産業が振るわなくなったということがある。担当職員の方は次のように語っている。

向こうの方が産業関係の結びつきを持ちたいという意向が強いということ、まあ一度行って見たらということ、行って見たんですけども、まあ、こちらの方の木材産業もですね、輸入建材に押されて、かなり衰退してしまっておりまして…。早い話が、まあ地場産業が無いんですよ。都市型の産業になってきてまして、江東区の方もバブル以後、大手の企業とかが移転してきてまして、そういう所と結びつきを持ちたいということ、産業関係も、この辺りで途絶えてしまってますね…⁹。

そして、行政間の交流は1996年のサレー側からの公式訪問を最後に行き来はない状況である。7年間で行政間の交流が途絶えてしまった理由に関して、姉妹都市担当部署は次のような認識を抱いている。

江東区としては、区民に対して国際理解・国際交流の機会を提供し、江東区の文化振興に資する等、文化交流を中心に姉妹都市交流をとらえてきた。一方、サレー市側は、経済交流を中心に考え、サレー市にとって目に見えるプラスになるものを求める姿勢が強かった。このよ

8 江東区役所区民部地域振興課区民交流係の角田宏之氏とのインタビュー、2002年12月10日（以下、江東区役所でのインタビューと略す）。

9 江東区役所でのインタビュー。

うな姉妹都市交流に対する双方の見解の相違が、上記の合意事項を継続・発展できず、交流活動が活発であるとはいえない状況にってしまった。また、江東区の財政状況の悪化も、多額の費用を要する訪問団や職員の派遣等の行政レベルの人的交流を困難にしている。今後は、民間レベルの交流の促進と支援という方向で姉妹都市交流を発展させた¹⁰。

このように相互の意図の食い違いと江東区の財政事情悪化が大きな理由となっている。従って、普通は、提携の節目になる年には記念行事を行うものであるが、その予定はなく、担当者は次のように語っている。

来年、再来年の4月ですかね。平成16年の4月は、15周年の節目になるんですけども。まあ、今のところはですね、こちらの方でどっか場所を取って写真展みたいな、サレーの改めて紹介みたいなことをやろうかと考えてるんですけど。まだ具体的に、向こうに行くとかの話は、全く出てないですね¹¹。

民間

江東区の特徴としては、表の備考欄に書かれているように、民間の小宮甲子太郎氏（江東区国際友好連絡会代表）が個人的に江東区とサレー市の交流に尽力していることである。平成7年に「小宮カナダBC奨学制度」を設け、平成13年までの7年間に、カナダから10名、江東区から12名の学生に奨学金を出している。2001年度には、この制度は終わることになったが、「今後は江東区の姉妹都市サレーの人々との交流をベースとして、両市の友好を進めるための交流活動を行（う）」という趣旨で、「江東・カナダサレー交流会」を設立している¹²。さらに、平成14年5月から第三砂町中

10 「交流の現状」、2ページ。

11 江東区役所でのインタビュー。

学校とサレー市のフレーザー・ハイツ中学校とEメールで交流を始めているが、これは小宮氏とサレー江東文化協会の岡田伸平氏の働きかけによっている¹³。

また、表の「民間」の欄に第三大島小学校の活動が載っている。第三大島小学校は、平成9年に江東区の奨励校となり総合学習で国際理解に取り組み始め、教育委員会からカナダの小学校とEメール交換ができる学校と

The screenshot shows a web browser window with the URL <http://www.koto.ed.jp/...sho/Canada/newpage5.htm>. The page title is "第三大島小学校のサリバン小学校" (Sandai elementary elementary school). It features a navigation menu with icons for home, print, and email. The main content includes a header with the school name in Japanese and English, a Canadian flag, and a photo of a school building. Below this, a text block states: "ホームステイを通じて、毎年交互に両国を訪れる交流をしています。カードを交換したり、絵を送りあって、日常の交流も行っています。" (Through homestays, we exchange visits to both countries every year. We exchange cards, send drawings, and have daily communication.)

第一回	カナダ⇒日本 1999 3.13-3.22
	1999年 3月13日 カナダのサレー市にある、サリバン小学校 から、テレサ先生が引率する 15名のカナダの小学生が日本にホームステイにやってきました。
第二回	日本⇒カナダ 2000 3.25～4.2
	日本からカナダを訪問したメンバーは5、6年生の児童18名、保護者5名、教員1名。ホームステイ5日間、バンクーバー市内見学、市長表敬訪

On the right side of the page, there is a vertical sidebar with the word "カナダ" (Canada) at the top, a Canadian flag, and a photo of a person in a white shirt. A small asterisk symbol is also visible.

第三大島小学校のホームページより

- 12 江東区国際友好連絡会「参加団体一覧」, 2002年10月, 5ページ, 「交流の現状」, 3ページ。
- 13 「交流の現状」, 2-4ページ。担当職員の方の話では、「もともとは仕事一本やりと言うか、もう70を越えられてまして、地元の地域の方にもお手伝いしたいということで、ご協力いただいているんですけれども。」ということである。江東区役所でのインタビュー。

して選ばれている。この「国際理解教育」を研究テーマにしていた教諭と、サレー市のサリバン小学校の担当者との間で話が展開してゆく。そして、カナダ側の担当者オコーナ氏が、「Eメールだけではつまらないでしょう。日本に行きましょう」とイニシャチブをとり、1998年(平成10年)に、突如、16名の子供達を連れて第三大島小学校にやってきたのである¹⁴。こうして、隔年毎の行き来が始まり、それぞれ2回の相互訪問を行っている。訪問団の人数は、引率の教員・父兄が5,6名と15,6名の小学生の合わせて20名前後である。期間は1週間程度である。カナダとの相互訪問が小学校のレベルで行われているというのも稀なことであるが、区立ではあるが教育委員会の担当分野には入らずに「民間のカテゴリー」で行われているというのも珍しい。

江東区立中学生海外短期留学(教育委員会による)

上述の様に、「江東区立中学生海外短期留学」¹⁵は姉妹都市の活動の一部としては捉えられていない。このプログラムは教育委員会によるもので、国際的な視野を持つ人間性が求められる時代においては、「中学生の頃から外国の社会に直接触れ、自信を持って国際社会で活躍出来る人間の育成」が必要であるとの認識のもとに始められたのである。日本交通公社から提案されたのはバンクーバー近郊のスクォミッシュであるが、教育委員会はスクォミッシュのトーバス市長とキャピラノカレッジと連絡をとり全面的な協力を得ることになる¹⁶。こうして第1回目の研修は1987年に始められた。姉妹都市提携が調印される2年前のことである。研修期間は、7月の後半の約2週間である。研修内容は、午前中の語学研修、午後の郊外学習、ホストファミリーとの生活である。こうして、1987年から現在に至るまで、

14 <http://www.koto.ed.jp/3dai-sho/Canada/SULLIVAN%20PROJECT.htm>. 江東区立第三大島小学校のホームページ。

15 <http://www.city.koto.tokyo.jp>. 江東区役所ホームページ(教育委員会)。

16 「短期留学実施経過」, 1ページ。江東区教育委員会「平成15年度区立中学校海外短期留學生徒の募集について」2003年3月1日。

カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響（井上）

The screenshot shows a web browser window with the title "江東区立中学校生徒海外短期留学 一年間の流れ" (Year-long flow of short-term overseas study for middle school students in the Tokyo Metropolitan Area). The page features several photographs and text blocks. On the left, a group of students is shown outdoors. In the center, a group of students is seated around a table in a meeting. On the right, a group of students is standing together. Below the photos, there is a list of five numbered items detailing the process of the study program.

ウィスラー

江東区立中学校生徒海外短期留学 一年間の流れ

今年も39名の中学生が、カナダへ短期留学に行つて来ます。

留学先 スクオミッシュ・キャピラノカレッジ

いよいよ出発です

江東区の姉妹都市サレー市を表敬訪問

1. 3月上旬、中学校長対象に次年度海外短期留学実施の説明会
2. 説明会の翌日、区立中学校2年生対象に募集要項配付
3. 3月中旬校内申込締切、校内第1次選考
4. 4月中旬校内最終選考、各学校6名以内の候補者を、教育委員会指導室長に推薦報告
5. 4月下旬、短期留学運営委員会による推薦者全員の面接
6. そのほか、留学先との連絡、選考結果の発表、出発準備会など

江東区役場のホームページより

中断される事なく毎年実施されている。平成14年度には第16回目の派遣が行われたが、それまでに研修に参加した生徒数は583名、引率者数94名にのぼっている¹⁷。選抜された生徒は、9回にわたる事前研修に参加することが義務付けられており、ほぼ4ヶ月にわたるプログラムと言ってもよい。姉妹都市の枠の外で行われているものの、若者たちに与えるインパクトは非常に大きく、将来のリーダーを育てる貴重なプログラムであると言える。なお、1990年度の第4回派遣からは、研修後にサレー市役所に表敬訪問を行っている。

17 「交流経過一覧」, 2-6 ページより集計。

III. 交流担当部署

1. 江東区役所担当部署

姉妹都市関係は、その提携時には総務課の担当であったとのことであるが、現在では、区民部地域振興課の区民交流係が担当している。区民交流係は、区民まつり、花火まつり、国際交流を担当しており、「地域も含めた姉妹都市交流ということで」、総務課から担当が移ってきたとのことである¹⁸。区民交流係は5名であるが、国際交流・姉妹都市担当職員は1人である。現在は、上記のようにサレー市との間で実質的な交流は行われてはいないし、どちらかと言えば、地域に住む外国人住民に対する日常レベルでのサービスの方が急務となっているようである¹⁹。

サレー市との間に実質的な交流はなくなってはいるが、上に触れたような儀礼的なやり取りの他に、民間から訪問する場合などの窓口となっている。担当の方は、「私は英語がほとんど出来ないもので、まずこの課に回ってくるのは予想外でした」とのことであるが、Eメールを使ってサレー側と連絡をしたり、サレー市の資料の紹介などを行っている²⁰。

因にサレー市側の姉妹都市関係担当部署は経済開発部局である。その主

18 江東区役所でのインタビュー。「江東区民まつり中央実行委員会事務局」も担当している。

19 江東区の総人口は410,903人であり、外国人登録は13,753人である(平成16年1月1日現在) <http://www.city.koto.tokyo.jp/>。担当職員の方は次のように語っている。「外国人登録だけではなくって、地域の国際化みたいな部分で、日本語ができないといった人のケアとか、そのような事もこちらで担当しています。小宮さんが代表になっている国際友好連絡会にはボランティアの団体がかなりありますので、そこと協力しながらやっています。地域国際化の方がメインになってきています。現在、大きな課題ですね。特に外国人登録者も急激に増えてますので。そういう方たちの、地域共存とかをやってますね。」外国人に対する行政のサービスの問題も区民交流係の担当であるが、前述の小宮氏が代表を勤める「江東区国際友好連絡会」がかなりの役割を果たして居るとのことである。江東区役所でのインタビュー。

要な役割は「サレーにおけるビジネス発展と雇用促進」にあるので、既に述べたように江東区との間で意図の食い違いが生じたことは、ある意味で避けられなかったことかも知れない²¹。

2. サリバン小学校との児童相互訪問担当部署（第三大島小学校）

第三大島小学校とサリバン小学校との相互訪問は、姉妹都市の枠組みの中での活動に入っているが、公的な資金的援助はないと言ってもよい²²。元来、一教諭の「総合学習の国際理解」研究に端を発しているわけで、第三大島小学校自身がプロジェクトの主体となっている。訪問団のメンバーは、江東区全域から選出される訳ではなく、全員が第三大島小学校の生徒である。その意味で、教育委員会の事業とも異なるということになる。従って、プロジェクトの責任は小学校自体であり、経費も全て自己負担ということになっている。

このような事情なので、学校長とプロジェクト担当の教員を始めとして、学校をあげての取り組みとなる。校長の話では、「今のPTAの会長さんは、これを第三大島小学校の特色ある学校作りの一環にしようではないかと、こんな事やっている学校ないんですから。続けていきましょうよ、ということなんですね。」とのことで、PTAの積極的な支持を得ている²³。そして、

20 江東区役所区民部地域振興課区民交流係「サレー市の概要」、2002年12月、6ページ。

21 サレー市の経済開発部局に関しては、次のホームページを参照。

<http://www.city.surrey.bc.ca/Inside+City+Hall/City+Departments/Managers/Economic+Development/default.htm>.

22 「民間」に対する公的援助は、「国際交流活動推進助成要綱」の「5名以上の区民で構成する団体が自主的に行う姉妹都市訪問事業」という第2条及び第4条に基づいて、「1グループ150万円以内」の補助が与えられることになっている。実際には、1回「10万円」の補助しかでていないとのことである。「東京都江東区国際交流活動推進助成要綱」平成4年8月10日江総総発第169号。江東区役所でのインタビュー。

23 第三大島小学校でのインタビュー。

保護者はもとより、区役所、英語ボランティア、国際友好団体、ライオンズクラブ、地域の病院・薬局も関わって、まさに地域が一団となって取り組んでいるようである²⁴。

3. 中学生海外短期留学担当部署（教育委員会）

「江東区立中学生海外短期留学」は区の教育委員会の事業であり、学校教育課が担当している²⁵。江東区内の22の区立中学校の3年生を対象にしており、応募者は3月初旬に申し込みを行い、まず学内選考が行われる。派遣定員数は、第1回目は23名であったが、第2回目からは35名になり、平成6年度より39名になっている。学校の生徒数に応じて一人枠、二人枠、三人枠の枠が与えられている。選考の基本的な考え方は、各学校の生徒数に比例して学校推薦の候補者を出し、運営委員会が面接をして選出するということである。これまでも様々な工夫が見られるが、例えば平成14年度には、リーダー的な生徒に対しては特別推薦枠二人分を設け、残りの37名分については学校枠に応じて候補者が出され、抽選により選ばれるという形式になっている。生徒の負担は、3万円程度（食費および事前の宿泊研修代）である²⁶。ほぼ全額が公費補助であるので、少なくとも1,000万円

24 <http://www.koto.ed.jp/3dai-sho/Canada/SULLIVAN%20PROJECT.htm>.

25 教育委員会の担当者の話しでは、江東区は区長のイニシャチブにより、非常に英語教育に力を入れており、早い時期から中学校の英語活動にALTを取り入れているとのことである。その特徴は、14、5名のALTが22校を回っているが、全員がブリティッシュ・カウンシルから派遣された講師だということであるが、このような試みは非常に珍しいと言える。以上のように英語教育を行ってきたことに対して、江東区の区長はイギリスより勲章を授与されたとのことである。江東区教育委員会学校教育課指導室における指導主事貝塚一石氏とのインタビュー、2002年12月9日（以下、「江東区教育委員会でのインタビュー」と略す）。

26 江東区教育委員会「平成15年度区立中学校海外短期留學生徒の募集について」2003年3月1日。

程度のプログラムということであろう。

22校から選ばれた生徒は、「みんな部活の部長とか、生徒会長とか、そういう子がほとんど」とのことである。しかし、3年生の夏は高校受験には重要な時期であるし、期末試験や文化祭などの行事とも重なる上に、毎週末に行われる9回の研修にも参加しなければならない。研修にはかなりの宿題が出されるし、最後の研修は「一泊二日で外国人のALTの指導助手」も参加して実践的な英語の指導がなされる。時期が時期だけに、悩んだ末に決心をする子が多いようである²⁷。「子供達がスゴク良いんで。やる気満々の子供達が来てますから。叩けばドンドン跳ね返してくれると言う感じなんで、先生方も、やっぱり遣り甲斐があると。」言うのが担当職員の方の言葉である。こうして、厳しい研修を経て、最初の研修では他人であった39名の生徒は、研修の最後には自分達で作ったスローガン「触れて感じて伝えよう——未知なる世界に心をのせて」に向かって進む集団となっていくようである²⁸。

研修先のスクォミッシュは、バンクーバーから車で1時間ほどの所にある山の中の町である。姉妹都市という関係でもないのに、1987年の第1回目から、毎年、町長が先頭にたって町を挙げて好意的に受け入れてくれている。ホームステイの提供にしろ、「向こうの好意でやってもらってる事なんで、」無料ということである。地元の高校生もボランティアのモニターと

27 江東区教育委員会『平成14年度江東区立中学校生徒海外短期留学報告書（第16回）』、2002年11月。（以下、「海外短期留学報告書」と略す）、11、13-15ページ。

28 「海外短期留学報告書」、16ページ。担当の方は次のように話している。「ほんとに、研修は大変でしたね。あれだけの研修に耐えられる子供じゃないと。今話したように日本の紹介をジャパントイムでやるというので、一人スピーチで紹介できるように、外国人講師に来てもらって、ズット一日目二日目とやって。夜は、生活の研修と音楽の先生が歌の練習をやって。先生方が、考えて、準備してですね。ま、大変ですけど、それだけやったから、どこに出してもシッカリした生徒たちという感じではありますよね。」江東区教育委員会でのインタビュー。

して研修の手伝いをしてくれる。もちろん日本に好意的だということもあろうが、ホームステイから“Good students!”と歓迎されているとのことである。やはり、江東区の代表として選抜された生徒ということと、事前の研修をしっかりとやっていっていることが大きいと思われる²⁹。

IV. 相互作用による影響

江東区とサレー市との姉妹都市関係の枠組みの中で、とりわけ目を引く活動をしているのは、第三大島小学校の場合である。また、教育委員会による中学生短期留学については、姉妹都市関係の枠組みの中では変則的な位置を占めているものの、その影響の大きさから言っても触れない訳にはいかない。以下、これら二つの場合について見てゆこう。

1. 第三大島小学校・サリバン小学校相互訪問

(1) カナダからの訪問団受入

第三大島小学校に、初めてサリバン小学校からの訪問団(児童16名、教員2名、保護者4名)がやってきたのは1998年(平成10年)のことであった。サリバン側の担当教員オコーナー氏のイニシャチブにより急速に事が進展したようである。急な22人のカナダ人の来客を、受ける側は全てホームステイにより対応することになる。最初でありながら、全期間それも全ての訪問客にホームステイ対応するという事は稀な事であり、意欲と情熱の強さが伝わってくる。

A. 地区を挙げての歓迎

日本では外国からの客人を受入れる時は、どうしても大歓迎してしまう傾向にあるが、第三大島小学校が、初めてサリバン小学校からの訪問団を受入れた時も例外ではなかった。江東区役所の姉妹都市担当部署の区民交

29 江東区教育委員会でのインタビュー。

流係、PTA、ライオンズクラブ、IFC (インターナショナルフレンドシップサークル)、地域の病院と薬局 (カナダ人の病人に対し無料での診療) も関わり、まさに地域総出での対応であった³⁰。そして、「家庭生活の中に入った時に、英語が困るだろうということで、緊急の英語ラインを作るために、中学校、高校の英語の先生まで呼びかけてですね、いざと言う時の体制を整えたということです。」という状態であった。そして、いかに歓迎したかについて、千葉校長は次のように語っている。

12チャンネルで放映がありましたね。カナダからの訪問ということで。派手なウェアを着た16名の団体がパターと歩きますのでね。この大島地区だけではなくて、東京全体にある程度響いた部分がありました。実は、歌舞伎座へ訪問したんですが、その時の観客の中から、「アッ、カナダから来たあの人達だね」という話が出たくらいに。一時期有名なことにはなっていたようです。マスコミとかも随分来ましたしね³¹。

ホームステイ家族も、初めてのせいと、短期間というせいもあり、つい頑張って接待をしてしまうようである。千葉校長は次のように述べている。

彼らが日本に来て経験した中で、サレーなんか繁華な所がない訳じゃないですか。みんな過剰な接待をします。だから、毎晩のように彼らパーティな訳ですね。夜になると、「夕飯食べにいこう」って、三々五々何家族かが集まって食事をしに行く訳ですよ。夜ですね、みんながゾロゾロと歩いてですよ、外出をして食事に行く、このことが結構嬉しかったらしいですね。喜びだったようですね³²。

30 <http://www.koto.ed.jp/3dai-sho/Canada/SULLIVAN%20PROJECT.htm>.

31 第三大島小学校でのインタビュー。

32 同上。

カナダでは、夫婦で週末に食事に出かけることは普通であるが、以上のように家族が毎晩のように繁華街に出て食事をすることはあり得ないことである。まさに、子供たちにとっては、生まれて初めてのことであったに違いない。

このような地域を挙げての「過剰な接待」は、よく理解できることである。通らねばならない通過儀礼かも知れない。このようにして、何度も迎え入れる中に、自然と無理のない自分たちの歓迎方式を見つけだしていくことと思われる。

B. ホームステイ

(a) 風呂とトイレ

直接に毎日接するホームステイへの配慮は非常に重要である。最初の時には、空間的にも時間的にも余裕のある家庭の方たちが、かなり引き受けたようである。千葉校長はその件について、次のように話してくれた。

最初に呼びかけた時には、江東区の成功者のような方が多い訳ですよ。結構なお宅にお住まいの方たちです。しかし、旧家ですので、汲み取り式のトイレだったりしてる訳です。子供たちは、絶対入らなかった。用を足さなかったんですね³³。

学校側は万一の場合、つまり「いつ日本の家庭に適応出来なくなって逃げ出しても良いように」ということで、ホームステイの間中はホテルを用意していたので、この問題のかなりの部分が解決されたようである。朝は、一旦ホテルに集合してから学校に来るようにしていたので、「トイレとか

33 同上。カナダの国立公園や州立公園にあるキャンプ場は、水洗トイレの所が多いが、汲み取り式のトイレも無いわけではないし、それ以外の場所ではかなり見受けられる。しかし、普通の生活では、まず見られないし、日本式トイレに慣れていないせいかも知れない。

は、ホテルとか学校で済ませてるとか」のケースがあったようである³⁴。

お風呂についても、12、3才の子供達にはかなり抵抗があったようである。千葉校長の話では、「それから、お風呂に絶対入らなかったと聞いていますね。子供は、やっぱり、溜め湯の所に入らないらしいんです³⁵。」ということで、「湯舟の湯」を「他人と共同で使う」ということは、かなり心理的に困難なようである。

お風呂については、相手が大人の場合でも、引受る側としては、かなり気を使う部分である。千葉校長は、その思いを次のように語ってくれた。

ステイを受け入れた場合なんですが、結構、困難があるんですよ。日本の家屋の構造上の問題ですね。向こうの校長さんが、我が家に来た時にですね、私は、今回は浴槽の湯は抜いておきました。お湯の栓を抜いておくと浴槽の中でシャワーを使ったりできるでしょう。それよりも問題なのは、家屋が狭いでしょ。彼らは、シャワーを浴びて、清潔になった体で洋服を着ていくじゃないですか。結局、それは寝室と繋がっているからこそ出来る訳で、日本の構造上だと、あの狭い脱衣場じゃない所でやらなきゃならない訳です。洗濯機があつたり、洗面器があつたりする場所で、してもらう以外にない。ウチはそういう狭い構造ですから。でも、どこもそうなんです³⁶。

以上のようにカナダからの客人に非常に気を使っている様子が伝わってくる。日本人の場合には、お風呂に入ると、普通は「寝る」ということとつながるが、カナダの様に朝シャワーを浴びてから身繕いをして出かけるとなると、これは「習慣の違い」と「構造上の問題」が絡まって、もう「してもらう以外にない」ということになろう。しかし、シャワーを浴びても

34 同上。

35 同上。

36 同上。

良いように「お湯の栓を抜いておく」という心遣いは、「言葉」か、あるいは「ジェスチャー」を伴った方が、カナダの客人にもその意図が明確に伝わったことであろう。

C. 学校で

(a) カナダ人はアイドルか？

カナダからの小学生に対して、日本の小学生はどのように接したのかが、第三大島小学校のホームページに載っている。

カナダ人と日本人に見られた大きな違いは、国民としての自尊心であろう。かれらがくれた「ぴん」(オリンピックなどで集めたり交換されたりする胸に着けるピン,社員章のようなもの)…日本の子供たちがピンを彼らからもらう場面が多々見られた。その際の様子は「戦後のギブミーチョコレート」の風景そのもののようであった。プライドの無い日本人そのもの。

また、白人である彼らは背が高く色白であるため、まるでスターのようであった。彼らを追いかけるグルーピーまでできる有り様。現在の日本文化の縮図がそのまま出ているような国際交流でもあった。日本で当たり前なのが、国際的にはかなり不可思議のものであることに気づかなければならない³⁷。

子供とすれば、白人のアイドルを追いかけるのと同じで、「国民としての自尊心」と見るのは大袈裟かも知れない。しかし、白人のタレントを追いかけて、白人のモデルが雑誌にも載っているように、「現在の日本文化の縮図がそのまま出ている」と言えるのかも知れない。だから、カナダの普通の子供としては、「本当に驚いてしまう、僕に対して愛してるなんて言う子まで

37 <http://www.koto.ed.jp/3dai-sho/Canada/SULLIVAN%20PROJECT.htm#rekisi>.

いるんだから、こんなことカナダでは決して無いよ。」という状態であったようだ³⁸。

このような様子に、千葉校長も、驚き、そして半ば自嘲気味ではあるが、厳しい目で観察している。

カナダからは白人でない子供も来てましたね。日本人は、すごいんですね。日本人の差別的な対応というのは。失礼ですよ。均等に接しないというのは。特定の子供に集中しちゃうんですね。向こうの子供は、そうじゃないですね³⁹。

しかし、これが現実で、これも子供達の「異文化接触」の第一歩であるのも事実である。そこから出発をして、白人も外見だけではないということ、そして「背が高くて色白でスターのような子」も、多くの場合は中年の体型になってしまい「現在の面影をとどめない」ものだと「客観的に」見れるようになるには、それなりの観察と年月の経過が必要だということであろう。もっとも、これらは程度の差こそあれ、大人の社会でも同じような事が当てはまるのかも知れない。

(b) 男の子と女の子の関係

いつも日本の小学校で子供達を見なれている目には、カナダの同年代の小学生の遊ぶ姿も、かなり異質のものと写るようである。日本の子供たちの中ばかりに居ると疲れてしまったようなので、屋上を解放して自由に遊ばせた時のことである。その時の驚きを、千葉校長は次のように語ってくれた。

4階の屋上、結構広いんですね。いいよ。自由に遊びなさいって。イ

38 同上。

39 第三大島小学校でのインタビュー。

ヤーっ、よく遊びますね。女の子と男の子が、仲良く遊びますねー。つまり、7年生で来たんです。7年生の女の子と6年生の男の子、喜々として遊んでますねー。あのフラフープで縄跳びをやって、一緒に飛んだりとか。ボールを取り合いをしたりとか。何ってことないですね。性の差という意識は彼らにはないですねー。特にわれわれ教師は子供と接してますから、高学年にもなると男女の性別を意識するんですねー。日本の子は出来ないんです⁴⁰。

丹後教諭も、全く同じ観察をしており、次のような補足をしてくれた。

男女でダンスをして、手をつなげと言っても、彼らはサッと手をつなぎますけれど、日本の子達は「エッ、イヤだー」というところから始まって、手をつながせるには、なかなか大変な差がありますねー⁴¹。

このように、日本の小学校では、高学年の体育の時間ともなれば、とりわけ大変で現場の教員はほんとうに苦勞をしているようである。手をつながせるにも、一騒動とのことである。そんな現場での体験からすれば、カナダの小学生の男女の振る舞いは、何とも理解を超えているのである。それは千葉校長の次のような言葉に現れている。

日本の子は、手をつながせるにも、エネルギーがいるんですけれどね。とんでもないエネルギーなんです。カナダの子たちは、意識してないですもんねー。やっぱり、カナダだからじゃないですよねー？ そーじゃなくて。彼ら見ると、ほんとに自然なんですからねー⁴²。

40 同上。

41 同上。

42 同上。

さらに、高学年の女子に関して、日本とカナダとの大きな差異を指摘している。

もう一つあるのは、日本の小学生の女の子たちは、生理を見たりするようになると、極めて運動しないようになります。つまり、体を使っての遊びをしなくなします。ところが、カナダの子供は、どーも違いますねー。大きい子ほど、活発ですね。今回、お別れの、あの時も、サリバンの女の子、サッカーやる。日本の女の子はダメなんですよ。すぐ二人とかになると、一緒になってお喋り始めちゃう。それで、高学年の担任を、非常に悩ませるわけです。スポーツをさせるということについては、非常に苦慮します。まず、真剣になってやりません⁴³。

このように、日本の小学校の現場に慣れ親しんだ教師の目には、カナダの小学生の男女の関係と性意識に関しては、不可解なものとして映ったようである。上で校長先生が「カナダだからじゃないですよねー？」と不思議がって述べているが、多分、それは「カナダだから」と言えるのではないだろうか。女性と男性が、日本とカナダの二つの社会においてどのような関係で生きているのかを、既に小学生の男女の関係と振る舞いの中に現れていると考えることができる。これらの事は、二つの社会における女性の役割と女性自身の自己認識と関わっている事柄であると解釈できるだろう。

(c) インターネットの威力

サリバン小学校からの生徒は11～12才である。1週間程度にしる、まだまだ親元を離れ異なる環境で過ごすのは精神的に辛いという子供もでてくることがある。事実、2回目の訪問の時には、かなり重症の子供が出てきたとのことで、当時の模様を校長は次のように話している。

43 同上。

二度目の子供の中には、えらいホームシックですね。もう泣いていたんですがね。それが、先ほどの写真の先生が親にメールを出してですね、そちらからメールを子供にあげてくださいと言ってですね、それでメールを貰ったら、もう途端にルンルンですよ。それが瞬時にインターネットは出来ますんで、これは大きいですね⁴⁴。

費用の面とトラブルを避ける面でも、サリバン小学校との間で、国際電話は一切使用しない取り決めになっているが、Eメールは自由に使えるようになってきている。電話のように料金も時差も気にすることなく、「ホームシックもネットが直す」環境が出現しているのである。

D. 大量のお土産

普通、日本人は他所の家を訪れる時には、まずは土産物に気をつかうことになる。そして、それが外国を訪問する場合には一層気を使うことになり、相手の外国人の方が戸惑うほどのお土産を持っていくことも多い。しかし、今回の場合は、全くその反対の事が起こったのである。校長先生は、その時の様子を次のように語っている。

土産の件ではですね、一番最初から、すごい量を持ってきたものからですね。スーツケースの半分くらいが、全部お土産だったようですね。家族が5人居ますとね、5人分全部用意していったんです。それが一つじゃないんですよ。いくつもあるんですよ⁴⁵。

筆者は、これまでに日本とカナダの両国で姉妹都市関係にある自治体を30ヶ所程訪れてきたが、カナダ人が日本人をお土産攻めにして驚かせた話を聞いたのは初めてのことである。カナダ人が日本を訪問する時に、周りの

44 同上。

45 同上。

日本人からお土産についてのアドバイスを聞くと、「どうして、そんなにお土産がいるんだ？」という反応が普通のようなのである。つまり、日本人のように、お土産を持っていく習慣がないからである。従って、この場合も、非常に気を使って、周りの日本人のアドバイスを受けていると考えられる。しかし、日本人のアドバイスによって「一つ一つ」選んだとすれば、「日本人を驚かせるほどの大量の土産」とはならなかったはずで、「土産の量が多すぎる」という所は「カナダ流」に勝手に解釈して決めたものと推測される。いずれにせよ、相手に対して失礼にならないようにという気づかいと、相手の習慣を学ぼうという態度が現されていると言っても良いだろう。

E. 「他者と接する姿」にカナダ社会を見る

第三大島小学校の以前のホームページには「食事のマナーとか人との接し方に見習う所がある」という趣旨のコメントが記載されていた。日本社会で日本の児童に接し、その振る舞い方に慣れている先生方にとっては、サリバン小学校の生徒のマナーは特に目を引き、そして考えさせられるものであった。担当の先生は次のような観察をしている。

社会化されてますよね。家庭ですでに大人としての対応を訓練されていると言うか、そういう所がありますね。いわゆる、気を使ってくれるんですね。例えば、ここに三人の大人がいて、ここに子供がきたとしても、ちゃんと三人と話せるように気を使ってくれるんですね。あちらの子は。社会的にどのように接するのかということが、それが、コミュニケーションなんでしょうけれども⁴⁶。

つまり、他者に対して、初対面の大人にたいしても、臆することなくきちんと接することが出来るということである。今の日本では、家庭でも、地域でも、学校でも、社会でも、自分以外の他者に対してどのように関わっ

46 同上。

ていくのかということ、教えてもいないし、教えてもこなかった。そのような環境の中に、「大人ともキッチリと接することが出来る」カナダの子どもたちが出現すると、際立った存在となり目を引くことになる。そして、われわれに対して、彼れらを造りだしてきたカナダ社会に目を向けさせることになるのと同時に、われわれに「何をすべきなのか」を無言のうちに語りかけてくれるのである。

サリバン小の生徒の食事のマナーにも、見慣れている日本の子供たちとは違って、「相手に対する気遣いと礼儀」を見つけたようである。第三大島小の給食に参加した時の様子を、校長先生は次のように述べている。

給食は突飛なものがでちゃったんですよ。何かを炊き込んだ混ぜご飯とか。ところが、特別なものを除いて、彼らは残しませんね。家庭でも、そうだったそうです。日本のお子さまは、好き勝手にしてますから。彼らは、出された物はきっちり全部食べちゃう⁴⁷。

この言葉から、「相手に対する気遣いと礼儀」を身につけた子供たちであるということが伝わってくる。多分、それはかなりの程度正しいと思われるが、それだけでは説明がつかない事柄であろう。上記の「社会的な対人関係」とは異なり、食べ物に関しては、自分ではどうすることも出来ない「味覚」の問題であるからである。例えば、アルバータ州の小さな町から来る子供たちは、伝統的な日本食や海の物は普通は敬遠することになる。子供だけではなく、大人の場合にも似たような傾向がある。このような理由から、海も近いし、日本人もかなり居るし、さらに日本最良の土地となれば、「日本食に接する機会も多く、かなり食べ慣れているせいであろう」という可能性が高いように思われる。

47 同上。

(2) カナダを訪れて

A. 生活の質

実際、カナダを訪問して、ホームステイをして、自分の目と耳で確かめてみると、日本とカナダとの生活の質を考えざるを得なくなるようである。サリバン側の担当者オコーナー氏宅でホームステイをした丹後教諭は、その感想を次のように述べている。

もう、ほんとに腹立ちますよね。オコーナーさんも年収 650 万なんですよ。数字の事ははっきり教えてくれる訳ですね。300 坪ぐらいの家に住んでおまして、リビングルームは 40 畳ぐらいあるのを二つ持っていたりですね。ガレージには車が 3 台はっていると、豊かな生活ですよ。年収は、こちらの方が多いでしょうけれど、カナダの方がはるかに豊かですよ。どこに、原因があるのかと、お互いによく話し合いますけどね。…やっぱり、物を大事にしてるし、物を買わないし、日本の家庭のように物は置いてないし、外食しないし…それに外で食べたとしても、残ったら持ち帰りますね。野菜炒めのようなものを食べて、このスープがイイと言ってですね、そのスープをビニール袋に入れて持ち帰った友達が居ましたけれど、あの時は、驚きましたね。やっぱり文化が違うんですか⁴⁸。

このようにして、日本とは異なる環境の中に身を置くことにより、まずはカナダの住環境に圧倒され、そこから生活の質と生き方の違いまでに目が向けられるようになり、日本の社会に対しても相対的に見ることができるようになるのである。

48 同上。

B. ホームステイにて

(a) 「お湯がでてこない」が言えない

サレー滞在中は、5日間のホームステイである。行く前には、英語だけではなく、日常生活に関することなども学んでいくが、やはり異なる環境に入ると、予期せぬ事が起こるようである。引率の先生の話では、次のような事があったとのことである。

周りには外国生活の経験者も居ますので、英語指導だけではなくって、トイレのドアとか文化面での指導もやっていきました。今回もシャワーノブの使い方が分からないというのがありましたね。日本とは方式が違って、引っ張るというタイプなんですね。これが、分からなくって、ホームステイのマザーに言えなくてですね、お風呂に入れなかったということがありましたね。日本の子は、言えないんですね⁴⁹。

ここに、「日本の子は、言えないんですね。」と述べられている。もちろん人にもよるであろうが、このような傾向はあると言えよう。そして、「日本の大人」にも当てはまることかも知れない。これは、案外「英語を勉強したり、日常生活のマナーを習っていったりすること」とは、別の事であるかも知れない。つまり、第三大島小を訪れたサリバン小の子供たちが「他者と接する術」を身につけていることは既に触れたが、この「他者と接する」という事と密接に関連しているのではなからうか。「お湯が出ない」他にも色々な問題は起こりうる。しかし、「他者との関わりあい方」を知らなければ、問題解決には程遠く、やっぱり「言えない」で終わることになるのである。

49 同上。

C. 学校にて

(a) 他者にたいする態度 — 異質のものを受入れる

サリバン小学校を訪れた日本の教師たちは、日本の子供達がカナダの子供達に接した時の態度とはあまりにも異なっているのに、驚きの念を持つとともに、そこにカナダ社会の特徴を垣間見ることになるのである。引率の教員は以下のような発言をしている。

違いを意識しない社会ですよ。日本は違いを意識する社会で。日本の子供があちらに行った時に、あちらの子供の中に入った時にですね、何の問題もなく、そのままスッと入っていくんですよ。全く違った様子もなく、彼らの一員のように、普通に居る訳ですよ。ところが、カナダの子が日本に来ますとですね、まるで、ヒーローのごとく、芸能人のごとく、ワッと集まってくる訳ですね。だから、違ったものに対する奇異の目とか喜びの目で、みんなで大騒ぎになっちゃう。あちらに行くと、何も起きず、ただ一緒に自然に遊んでいると、特別視もされないし。それは強く感じましたね⁵⁰。

上の発言で「違いを意識しない社会、違いを意識する社会」と捉えているが、より正確には「違いを意識する」が「違っていて当然」である社会と「違っていると具合が悪い」と感じる社会ということであろう。あるいは、「違っているからこそ貢献できる」と考える社会と、「違っているけれども他に合わせていく」ことが必要と考える社会でもあると言えよう⁵¹。

50 同上。

51 もう随分と前のことであるが、カナダに住んで5年も経った頃、周りの人たちから、「どうしてカナダ人にならないの」と尋ねられたことがある。予期しない質問に驚いたものである。彼らにすれば、ごく普通の質問であるが、日本では考えられない。井上真蔵「異文化接触とコミュニケーション」、『北海道から』（特集：国際交流の光と影）北海学園大学、1985、44-45 ページ。

(b) 言葉じゃなくても

現地に行って、やはり一番の心配は言葉が通じるかどうかという点である。行く前には、「自分の意志というのをジェスチャーとかを使いながら、何とか分からせるようにと」、指導することになる。しかし、「もちろん、そんなんで使えるはずでもないですよ。」という気持ちを抱いて行ってみると、意外とコミュニケーションが成立しているのに驚いたそうである。引率の先生は次のように語っている。

で、実際に、あちらでも、ほとんど子供は不自由なく、つながってるんですね。その辺りが、子供って、不思議ですよ。一緒に動きまわっているうちにですね、ゲームをすること自体でですね、行動すること自体で、随分お互いが分かるようになってきているようですし、その辺りが、なかなか素晴らしいかったんじゃないかと、思いますよね。ボディランゲージだけでも、子供同士は分かり合えるんじゃないかなー。かなり楽しいそうだったんです⁵²。

「もちろん、そんなんで使えるはずでもないですよ。」という言葉のように、普通は、「分かりあえるはずはない。」上記のように「分かり合える」ということは、「言葉がなくても分かる」ゲームという事柄を通じて「空間を共にする」という感覚であろう。大人であれば、「同好の士」と言うことで、例え異なる言語の者同士でも「話は通じる」ということであろう。従って、以上の事は、「言葉を使わなくても分かりあえる事柄」と「言葉を使わないと分かりあえない事柄」の認識が重要であり、同時に「言葉を使わなくても分かりあえる事柄」の役割とその重要性を示唆するものであろう。

52 第三大島小学校でのインタビュー。

(c) 授業のあり方

日本の教室で教えられている先生方が、サリバン小学校の教室の授業風景に接して驚くのは、生徒の授業に対する態度と意欲の違いである。日本の教室とサリバン小の教室を比較して、ある若い先生は次のように語っている。

カナダの生徒たちは活動的ですね。それでいて、授業なんて静粛の中にも、全く声一つ聞こえない中で授業しておりますからね。これは差が付くと。その45分なら45分の時間をほんとにフルに集中して授業を受けてますけど。日本では今それ見つけるのは、ほとんど有り得ないですよ。日本の生徒は、生き生きしていないんですよ。日本では、ほんとに、したいことが無くなってるわけですよ。何をしたいの？ それが無い。外国の人達は何をしたいのか、はっきりしてますよね⁵³。

このように、「サリバン小学校」の授業を見て、「授業本来の姿」が存在していると日本の若い教師が認識することは重要なことであろう。もっとも、カナダの学校は日本のように文部省のもとに画一化されている訳ではないので、カナダの学校が全てこのようだと考えないように注意することが必要であろう。しかし、まず彼我の差違の認識から始まり、その原因を考えることにより、ギャップを埋める試みが可能になるであろう。

D. 個人が物事をうごかす

個人がイニシアチブを取りにくい日本の社会からカナダを訪れると、個人の果たしている役割の違いが認識されるようである。引率の先生は次のような観察をしている。

53 同上。

この彼女が一番上に居るんです。この人が頂点に居て、後はみな支える組織が出来上がってくるんですね。発案者が一番上に居て、ほとんどの仕事を彼女がやっています。それで支える人達をどんどん増やして行って大きくなってきているんですね。私も最初から携わっている訳なので、彼女とも友人関係にあるものですから、内面の話も色々聞かせていただいているんです。最初は、確かに彼女は孤立無援に近かったです。かなり厳しかったのですが、この間、校長先生と一緒に行った時には、もう確固とした地位を築いていましたね。揺るぎない牙城を。上の教育委員会の人達まで、そこに引きずり込んだというか、そういう確固たるものが出来上がってましたので、今後、相当回数続いていくだろう風に見えました⁵⁴。

この言葉から、サリバン側の担当者が、最初どのような立場に居て、現在どのような役割を果たしているのかが、よく分かる。そもそも、この担当者の方がサリバン小の16名の生徒を連れて日本訪問を実現した教師であり、その第一歩はコンピュータ教育の重要性を認識していた当時の校長の全面的な支持を取り付けることから始まったとのことである。このように個人が物事を動かせる社会であるが、それは同時に、その個人が居なくなれば、プロジェクトの継続も保証されないということも意味している。

E. 多過ぎるお土産はカナダ流？

サリバン小学校からの訪問団が、大量のお土産を持ってきて第三大島小学校の教師たちを驚かせた事については上に触れたが、サリバン小学校を訪れた時にも同じような体験をしている。その様子は、第三大島小学校のホームページでも見ることができる。

8:00を過ぎるとプレゼントタイムになりましたが、サリバン小の

54 同上。

PTA からトム校長の手作りの木彫りの大きな皿を巨大な額に入れて贈られました。PTA からはその他にも一人一人にたくさんのお土産をいただき、持ち帰るのをどうしたらいいかと迷うほどでした⁵⁵。

ホームページだけを見ると、多少誇張されているのかなと思うかも知れないが、文字通りその通りだったようである。校長先生も「いやー、今回頂いてきたお土産は、ちょっと多すぎじゃないかって、私はずーっと思ってましたよ。」と言う程の量であつたらしい。その時の様子を、校長先生と引率の先生は、次のように話されている。

私たちが行った時ですね、帰りに沢山のお土産をいただいたりとかしてますのでねー。もう目一杯で何も入らなくなっているのにもかわからず、こんなデカイもの、こんなデカイものを、これも、これも、持って行って感じでしたね。それは、家庭だけじゃなくて、学校サイド、PTA サイドでそういう事がありましてですね。うーん、すごい自然な感じで、今度これからもドンドン交流を続けていきたいっていう意図があるんだらうなって、そういう風には思いましたけれども⁵⁶。

びっくりしながらも、「まあ、豊かな地域ではあるということで。カナダでは、そういうもんだと、思っていましたもんで。」と言うように「カナダ流」と解釈していたようである。上の「ドンドン交流を続けたい」ということと、日本に対する好意は、間違いはないであろう。しかし、既に上に述べたように「カナダ流」という可能性は低い。北米の大平洋側に住むインディアンにはポトラッチの風習があるが、サリバン小学校の関係者たちはイギリス系の人びとなので、その影響は考えにくい。やはり日本人が相手なので、相手の習慣・文化を尊重する意味で、周りの日本人や日系人のア

55 <http://www.koto.ed.jp/3dai-sho/Canada/2002/report.htm#2>.

56 第三大島小学校でのインタビュー。

ドバイスを受けて、自己流に解釈した可能性が一番強いように思われる。このような解釈が当たっていないかも知れないが、「費用がかかること」であるし「無理をすること」になるので、校長先生も「それは話していきたい内容ですね」と話しておられた。お互いが納得できる方法を見つけ出されれば、共同で問題解決をしたということであり、まさに異文化接触の醍醐味を味わうということであろう。

2. 江東区中学生海外短期留学の場合

(1) 日本とは違う — カナダの自然と街

A. こんな都会があるんだ

東京は世界の大都市で、江東区の中学生だから東京のことは知っている。だから、都会と言えば東京のイメージが頭に浮かんでくるが、これとは全く異なった都会と出会うことになる。ある女生徒は、次のように観察している。

“東京・バンクーバー” 同じ都会として並べてみても、全く異なっていました。私の“都会”というイメージは、ビルばかりで緑が少なく、空気は汚れている……。でもバンクーバーは正反対でした。まわりは、山や木ばかりでゴミもあまり落ちていなくて、空気がきれいで空が青く澄んでいる⁵⁷。

そして、バスの中から見る町並みも、「本当にかわいい。赤や白を基調とした家が多く、どの家も花や緑で一杯で、とても広そうでした。」と述べる子や、今まで見たこともない景色が目の前に広がり、「本当にきれいで、見ても飽きず、夢の世界を走っている気がしたからです。通り過ぎる景色から、自然の雄大さを感じました。」と述べている子もいる⁵⁸。

57 「海外短期留学報告書」, 45 ページ。

58 同上, 44 ページ。

さらに、バスを降りて、自分の足で街を歩くと、バスの中からは見えなかった部分も見えてくる。そして、ゴミが落ちているのが当たり前の都会から来た生徒の目には、次のように映るのである。

カナダの街はとても綺麗でした。道にゴミ等落ちていません。都会のバンクーバーでも、不快に感じるようなことが全くありませんでした。また、緑が多く空気がとても澄んでいます。どこへ行っても必ず緑があり、自然をととても大切にしています⁵⁹。

このようにカナダの都会を目の当たりにして、「自分たちが知っている都会とは全く異なる都会」があることを、初めて知るのである。そして、「自分たちが知っている東京という都会」を客観的に考えることができる視点を得ることになるのである。

B. 大自然が考えさせる

研修が行われるスクォミッシュの町は山の中にあり、その自然環境が江東区の生徒たちを驚かせる。ある女生徒は感激の気持ちを次のように語っている。

先生の「もうすぐ着くよ！」という声で目が覚めました。起きたらすぐに Squamish の街が目に入りました。とても感動しました。なぜなら、東京では絶対見られない山が目の前に広がっていたからです。「こんな大自然の中で2週間も過ごせるんだ！」と思うとワクワクしてきました。バスから景色を眺めていると、すぐ Capilano College に着きました。降りて空気を吸うと「東京都は全然違う。」と言うことを実感しました。「どこからでも山が見えるし、きれいな空気が吸えるしすごく良い所だなぁ。」と思いました⁶⁰。

59 同上，26 ページ。

しかし、カナダの大自然は、生徒たちに感激を与えるだけでなく、さらに大きな影響を与えることもある。女生徒の一人は、「ブラッコム山」の頂上に登った時の事を思い出しながら、次のように述べている。

私は、一生忘れません。今までこんな美しい景色を見たことがありません。森林破壊・地球温暖化が進む中「このままで良いのか?」。私は地球の宝を無くしたくありません。自然保護に努めたい。10年後、またあの大地を踏む時も、あの美しい景色が広がっていますように…⁶¹。

カナダの「自然のままの自然」が身近にあるということが、「森林破壊・地球温暖化」という大きな枠組みの中で考えさせることになったのであろう。日本では、売店もなくスピーカーから音楽も聞こえてこない「自然」というのはお目にかかれないせいかも知れない。

(2) ホームステイで学ぶ

A. 伝えるということ

生徒たちは、自分の英語力で大丈夫だろうか、ホストファミリーとうまくコミュニケーションができるのだろうかと心配しながら生活を始めることになる。英語を話すということ、そして伝えるということに対して、考えを変えていくようである。ある女子生徒は次のように述べている。

Home stay 1日目に、mother が家の中を案内してくれました。bath room, living room, kitchen, 私たちが使う部屋などを、わかりやすい英語でジェスチャーを交えながら説明してくれました。私も何か話さないと悪いなと思い、話そうとしたけど、英語が頭から出てきませんでした。でも、さっき mother がやったようにジェスチャーと効果音

60 同上, 32 ページ。

61 同上, 34 ページ。

などを交えて話すと、mother は一生懸命に理解しようとしてくれたので、英語を話すことに自信が持てたような気がした。前までは、ジェスチャーなんて恥ずかしくてやりたくないと思っていた私が、この時は、ジェスチャーがないとやっていけないと思ったことに一歩成長したなと感じました⁶²。

「ジェスチャーなんて恥ずかしい」と思っていたが、「ホストマザーもやっているのでもやってみよう」ということで試してみると、「目の前の現実が動いていく」のである。日本では難しいかも知れないが、そこには今までは出来なかった事をやってみようという気にさせる環境があるのである。

B. 自分が変わる

江東区では中学校の英語活動に早くから ALT を取り入れた授業をやっているし、生徒たちも江東区立中学校 22 校の代表として選ばれた生徒であるので、「英語は単語を並べれば通じるだろう」と割と簡単に考えている生徒も居るようであった。しかし、「現実には甘くなく、単語を並べて伝わらない」ことを実感した生徒も多いようである。ある女子生徒は、その時の様子を次のように語っている。

“百聞は一見にしかず”ホストファミリーと対面した夜、私の頭の中にはこの言葉がぐるぐると回っていました。はっきり言って私は、自分の英語力と積極性を過信しすぎていました。聞き取れない・通じない・分からない、ワースト 3 拍子がそろった私は、かなりネガティブでした。そして同時に言いようのない悔しさがこみ上げてきました。

次の日から、私は自分を変えるために必死でした。“伝えたい”この思いだけを胸に、私はしゃべりました。今は今しかない、少しでも弱気になって後ろへ引くと、後で絶対に後悔する。たどたどしくても、

62 同上，24 ページ。

文法がめちゃくちゃでも、単語だけでも、ジェスチャーでも、伝えたい・しゃべりたい、そして相手を理解したい…。これをモットーに生活していると、しだいに自分の気持ちを伝えたり、相手の気持ちを感じたりする道具が、言葉だけではないことに気付いてきました⁶³。

さすがに選ばれた生徒である。「悔しさ」をバネに、「今は今しかない」と自覚して、「自分を変えて」いっているのである。そして、そこから、言葉を超え文化を超えて理解するには、「まず己の積極性を高めることが第一で、普段通りの自分では、はっきりいって何もできません。」という結論を導きだしている⁶⁴。

C. 普通の日、国旗が掲げられている

たまたま、ある女生徒がホームステイした家には、庭にカナダの国旗が掲げられていた。カナダでは、普通の日、メイプルリーフの国旗を目にするのは困難なことではないが、日本で日の丸を普通の日、一般の家庭で目にするのではない。だから、この生徒は驚いて、次のように述べている。

私が驚いたのは、私のホストファミリーの家の庭に、カナダ国旗が立っていたことです。きっと私のファミリーだけでなくこの家にもあったと思います。日本では、日の丸を飾っている家なんてほとんど見かけません。カナダの国旗があることに気づいたとき、私はとても感動しました。カナダの人々が母国をととても愛している証拠だと思いました。…母から、以前は日本でも、行事等で国旗を掲揚していたと聞きましたが、政治的な意味で掲揚しなくなったようなことを聞きました。私は、難しい事はよく解りませんが、国民が国を愛するという気持ちを持つことは大切な事だと思いました⁶⁵。

63 同上、48 ページ。

64 同上。同じような感想は、21、24 ページにも載っている。

ほんとうに、カナダの国旗が青い空をバックにして一般の家庭に舞っているのを見ると、自然とこの女生徒のような気持ちになるのは当然のことであろう。しかし、メープル・リーフの歴史は日の丸の歴史とは全く異なっている。あのカナダの国旗は、カナダ全国の市民からデザインを募集して、自分達自らの手で決めたのだという事実を知るようになれば、日の丸と単純な比較はできなくなると思われる。

D. 自然との関わり方

ホームステイ中に、ホストファミリーと行動を共にして、何ともない日常生活の中から、カナダ人が何を大切にしているのかを学んだ生徒たちもいる。その何気ない行為が、日本では見られなくなっただけに、大きなインパクトを与えているのが感じられる。それは、次のように散歩の途中での出来事である。

Free Day の時、私の家族は湖へ行きました。私たちは、湖を散歩しながら、一周しました。途中で空き缶とペットボトルが落ちていました。それを見たホストファーザーは、それを拾ってゴミ箱へ捨てました。しかも、それらは急な斜面に落ちていて、すごく危険なことにもかかわらず拾ってました。私はそれを見て言葉をなくしました。こんな光景、日本では絶対見られないと思いました。カナダを愛する「愛国心」の強さに私は圧倒されました。そして、そういう心の持ち主に感心させられました。とても立派なファーザーでした⁶⁵。

さらに、家の周りのことに興味と関心があり、ホストファミリーと話す機会があれば、カナダ人の考え方を知ることができる。ある生徒は次のように述べている。

65 同上，26 ページ。

66 同上，27 ページ。

例えば、もし家の庭にある木が邪魔だったら、その木を市にあげる事が出来るそうです。もし無断で捨てたら罰金になると聞きました⁶⁷。

このように、子供たちは、家の前の街路樹や庭の木などの「一本の木に対しても」、日本とは全く異なるカナダ社会の考え方が現されていることを知るのである。

E. 他人との関わりあい方

まず生徒たちが最初に気がつくのは、他者との関わりあい方が、日本とは異なっているということであろう。ある生徒は、その模様を引率の先生に次のように伝えている。

「何かをすると必ず Thank you と言ってくれるし、Thank you と言うと必ず You are welcome と言ってくれる。自分は今まで、こんなに丁寧に人と接していなかった」と言う生徒もいました⁶⁸。

別の生徒も、同様の事に感心したようで、次のように語っている。

mother に洗濯機を使って良いですか?と聞くと「いいわよ、私がやってあげるから。」と、言ってくれたので Thank you と言うと必ず、You're welcome や that's Ok と言ってくれるので、それだけでコミュニケーションがとれたような気がして、とてもうれしかったです⁶⁹。

これらは、カナダの家族の中でも「何かをした時」には、必ず交わされる言葉である。生徒たちは、日本の家族の中では見られない事であり、経験

67 同上, 26 ページ。

68 同上, 5 ページ。

69 同上, 24 ページ。

したこともない事なので、その違いに即座に気がつくのであろう⁷⁰。

このような事を切っ掛けにして、生徒たちは家族、そして周りの人への話し掛け方が、日本と異なっていると感じるのである。ある生徒は、カナダ人のそのような振る舞いを「優しさ」という言葉で表現している。

僕はカナダで Helen さんと Ben さんのお宅でお世話になりました。この家族から沢山のことを学びました。まず、最初に学んだことは“優しさ”です。例えば、他人に声をかけることは日本ではあり得ません。でもカナダの人たちは“Hi”とか“How is doing”と声をかけてコミュニケーションをとっていました。近所の人のお家に遊びに行ったとき、足の裏にトゲが刺さって困っていたら、“Are you OK?”と声をかけてくれ、ピンセットと針を貸してくれました。とても嬉しかったです⁷¹。

このように日常生活において他人に声をかけるという事、これは現在の日本では見られないだけに、生徒たちの心を捕らえたようである。ある女子生徒は、「自分もそんな風になりたい」との気持ちを、次のように述べている。

ホストファミリーと会って沢山のことを学びました。特に「人のことを大切に思う気持ちが重要なんだ。」ということでした。今まで私は、

70 もしかすると、日本語にはこれらに相当する言葉がないのかも知れない。「ありがとう (ございます)。」に対して、「どういたしまして。」という対句があることはある。しかし、果たして、この対句が家族の中で、つまり「夫婦の間」、「親と子の間」、「子と子の間」で使用可能な言葉であろうか。“Thank you.”と“You're welcome.”は、家族であろうとなかろうと、「人と人」との間で使用可能な言葉である。つまり、日本語では身内に対する上記のような感情表現を現そうとしても適切な語が存在しないように思われる。

71 同上、23 ページ。

ひとのことを第一に考えていなかった気がします。これからは、友だちのことをもっと気遣って今より優しく大切に思えたらいいと気づきました。ファミリーから学んだことを全てこれからの生活、高校、大学、就職と成長していく中で活かして、今の自分よりも、もっといい自分に変われたらいいと思っています。これは、とても難しいことですが、でも、時間はかかるけれど頑張れば、きっと変われると私は信じています⁷²。

若い心に、「時間はかかるけれど頑張れば、きっと変われると私は信じています」と言わせるだけのインパクトを与えているのである。カナダ人の生き方に接して、生徒たちが変化していく様子が明確に現れていると言えよう⁷³。

F. 家族って何？

日本では、今や家族が集まってご飯を食べるという事自体、少なくなっているし、中学生ともなれば、親と言葉を交わす事も少なくなっているのかも知れない。そんな日本から、カナダのホストファミリーと生活を共にすると、家族のあり方があまりにも対照的なので、嫌が応でも家族の事を考えるようになるようである。ある女子生徒は、引率の先生に次のように語っている。

72 同上、20 ページ。

73 引率の教師は、カナダ人が他者と積極的に関わっていかうとする姿勢を見て取って、次のように表現している。「歓迎してくれるって言うんですかね。どうぞ、どうぞ。ウチにベッドルームが3つあるんだから、その中の一つを提供するのは当たり前というか、そういう雰囲気ですね。自分たちは、これをやってあげるのが当然なんだという、そういう意識の人がすごく多いんですよ。それが文化の違いでしょうかね。」江東区教育委員会でのインタビュー。

言葉がうまく通じなく、ホームステイ先で困っていたある生徒は、「自分からお手伝いをしたいと言い、食事の片づけをした。家族の一員になれたような気がして嬉しかった。日本ではここまで積極的になれないと思う」と前向きに生活しようとする姿を報告してくれました⁷⁴。

日本では、気持ちはあったとしても、これほど素直にはなれないのかも知れない。あるいは「食事の片づけをして」と言われても、「勉強があるから」と言えば「立派な理由」であり、手伝うこともなかったかも知れない。自分から言い出して「家族の一員になりたい」という積極的な気持ちは、日本では全く必要はない。まさにカナダという異文化の中に身を置いて生まれる感覚であろう。そして、このような気持ちが、自分の家族に対する関係と家族という事について考えさせることになるのである。この点について、ある生徒は次のように語っている。

家族とのふれあいは、日本ではあまり気にしていなかったのですが、ホームステイをして家族のふれあいは、簡単そうで意外と難しい事に気がつきました。英語がうまく通じないからなおさらでした。でも、コミュニケーションの大切さを知りました。毎日私たちのことを気にとめて話しかけてくれたファミリーや、その知り合いの方々に優しくしてもらいました。たくさんお世話になって、たくさん迷惑をかけてしまったと思いますが、素晴らしいファミリーでした。その人たちが、私のことを「家族の一員」と言ってくれたときは、ありがたい気持ちでいっぱいでした⁷⁵。

「家族の一員」ということで、「ありがたい気持ちでいっぱいになる」ことなど、当然、日本では起こったことはなかったであろう。しかし、カナ

74 「海外短期留学報告書」、5ページ。

75 同上、22ページ。

ダのホームステイ・ファミリーと共に生活をするにより、感謝の気持ちが生まれたのである。こうして、日本に帰れば、恐らく、自分の「家族」が今までとは異なって見えることになるのではなかろうか。そして、両親に対しても、今までは感じたことのない感謝の念を感じるようになるのではなかろうか。

G. ランチに見る心遣い

日本のお弁当と比べて、カナダのランチは普通簡素なものが多いようだが、スクォミッシュではのランチは異なっていたようである。引率の先生も感心するような内容であったらしい。

あまりにも質素な家があったら言わないといけないとか。そういうのを見た限りでは、ちゃんと肉もあるし、サンドイッチにパンとリンゴが入っていたりとか。全体的に良くやってくれてると思う感じですね。あんなによく作ってくれるのは無いよって、英語の先生なんか、これはスゴイよって。よくこだけ作ってくれてるなって。パンとリンゴだけって家もあるよとかね。こんなサンドイッチ作ってくれるの、スゴイよって。基本的には長年の積み重ねるのが、あるのかなって思いますね⁷⁶。

もっとも子供たちは、初めての経験なので、カナダのランチはそれが普通なんだと思っているかも知れない。しかし、子供も「お昼は Mom が朝から一生懸命作ってくれてとてもうれしかったです。毎日、違った内容でとてもおいしかったです。」と言っているように、かなり力を入れて作ってくれ

76 江東区教育委員会でのインタビュー。引率の先生は次のように語っている。「昼食は各ファミリーが心を込めて作ってくれたお弁当です。デザートや果物、ジュース等がついた素晴らしいお弁当で、見ていてうらやましくなりました。」「海外短期留学報告書」、2ページ。

た様子である。そして、他にも「“Mom”は大変おいしい料理を毎日作って頂きました」との声も聞かれている。もちろん上にあるように、「長年の積み重ね」もあるから頑張ってくれてくれるのだろうが、どうもスクォミッシュのホストファミリーの人たちは食文化の豊かなヨーロッパの国々から移民してきた人が多いのではないかと推測される。いずれにせよ、子供たちにはファミリーの心遣いがハッキリと伝わったようである。そして、ホームステイがビジネスとなっている今日では、このように「立派なお弁当」を作ってくれるような家庭は貴重な存在になっていることを認識しておくことが必要であろう。

H. 家族は共に

スクォミッシュでの家族の関係は、日本の、それも大都会における家族の関係とは非常に異なっている。ある生徒は次のように語っている。

僕のファミリーは、いつもいつも本当に気を配ってくれました。どちらも仕事で忙しいにもかかわらず、交互に毎日送り迎えをしてくれました。Mr. George は自分の豪華なプールを僕たちのために、いつも開放し自分のビリヤード台を開いて、ビリヤードを教えてくださいました。“Mom”と呼んでいる Ms. Lue Ann は大変おいしい料理を毎日作って頂きました。さらに、カナダ柄の帽子や、お小遣いで買うと高いからと言って、メープルシロップを、また、引率の先生方も欲しいと言った、画期的なランチボックスまでプレゼントしてくれました⁷⁷。

カナダの家族について、引率の先生は次のように観察している。これは、引率の先生たちが生徒たちにもっと練習をさせようとして、迎えにきたホストファミリーが待たされて苦情が出た時のことである。

77 「海外短期留学報告書」, 41 ページ。

ファミリーが車で来て待ってて、4時に引き取ったら、すぐ海に連れて行きたいんだとか、今日は湖に泳ぎに行きたいんだとか、そう言うのがあるんですね。だから必ずわれわれが好意で、もっとこうすれば良くなるのにというのでやってるのも、向こうの人達にとっては、ファミリーとのプライベートな時間をもっと重要だということなんです78。

以上の事から言えることは、常に家族が共に行動しようということであろう。家には、暖炉、プレイルーム、ビリヤード、スイミングプール、などの家族が集い共に過ごせる設備がある。カナダの小さな町では公共の交通機関がないので、共働きであっても子供の送り迎えは必要であり、普通のことでもある。また仕事が5時に終われば、通勤に時間はかからないので、家族と一緒に過ごせる時間は十分にある。とりわけ夏時間の期間は、5時に仕事が終わると「日が暮れるまでに、もう一日ある」と言った感じである。そして、家族と出かけると言っても、お金を使ってどこかに行くという訳ではない。すぐ近くには、湖や山があり、ある生徒が上に述べていたように、湖の周りを散歩するということもある。生徒たちは、このような背景までは考えてはいないが、送り迎えをしてくれ、家族と一緒に過ごす時間が圧倒的に多いという事は容易に分かることである。そこにホストファミリーの「気遣い」を感じ、同時にカナダ人の「家族を大事にするという価値観」の存在を感じることになる。このようにして、カナダの家族との出会いが、今まで考えたこともなかった「自分の家族」について、そして「日本の家族について」考えさせることになるのである。

I. 教室で——名前を覚えていてくれた

日本の教室とカナダの教室とは、様々な点で異なるが、ある生徒はカナダ人の先生が自分の名前を覚えていてくれてファーストネームで呼んでく

78 江東区教育委員会でのインタビュー。

れてことに、感激している。

ランディー先生は、カナダ人によく見られる、とにかく親切で親しみ易かったです。“Good Morning”と声をかけると、“Good Morning. How are you?”とかえしてくれたことは今でも覚えています。コミュニケーションをとる上で最も大切な挨拶をきちんとしてくれた先生は、みんなの人気者でもありました。その理由の一つとして、あんな短期間に大人数の名前を覚えてくれたことでした。「人の名前を短期間で覚えるのは難しいはず」と思っていた僕は、先生から名前を覚えてもらうことは、期待していませんでした。しかし、先生から“Hiroaki”と呼ばれた時はとても嬉しかった⁷⁹。

この場合のクラスのサイズは、39人が二つのクラスに分けられたので、20人弱の大きさである。そして恐らく初日のクラスか、あるいは2回目ぐらいに名簿も見ずにランディー先生は“Hiroaki”と呼んだのであろう。当の本人は、名前を呼ばれることは予期も期待もしていなかつたので、驚くと同時に感動したのである。日本では、同じような状況の下でも、そんな事は起こったことがなかったからであろう。しかし、カナダでは教室以外の場所でも、個人はファーストネームで呼び合うのが普通である。個人が重視される社会では、ファーストネームを憶えるのは非常に重要なことである。先生にとっては、職業柄とりわけ必要な要件である。多分、ランディー先生も江東区の生徒たちに会う前から、写真を見ながら名前を覚えたはずである。それはともかく、カナダ人の行動様式が日本人の生徒に驚きを与え、カナダの先生を大好きにさせたのは確かなことだと言えよう。

J. サレー市表敬訪問——カナダ人と国歌について

1990年より、スクォミッシュでの研修が終わってから、サレー市役所に

79 「海外短期留学報告書」、28ページ。

表敬訪問を行っている。市役所のホールで、生徒たちは歌をプレゼントすることになるのだが、目の前では日本では見た事もない事が起こるのである。この初めての光景に対して、ある男子生徒は、次のように表現している。

そして、いよいよ今まで練習に練習を積んできた歌の発表です。場所はホールで、役場の方々の仕事をわざわざ中断して頂いたため、より一層気合いが入りました。最初、「時の旅人」を歌い、その後に「カナダ国歌」を歌いました。「時の旅人」も良かったですが、「カナダ国歌」は想像を絶するものでした。歌を歌い出したとたん皆立ち上がり、とても感動しました⁸⁰。

こうして、今までに見たこともない光景に感激し、国歌の役割と人々との関係を認識することになる。そして、別の女子生徒は、「日本人だったらどうするだろう？」と言う考えが頭に浮かんだようである。

事前学習で聞いていた通り、カナダの国歌が流れると、人々は立ち上がって聞きます。実感したのは、サレー市表敬訪問の時でした。私たちが国歌

カナダ国歌 (O Canada!)

おお、カナダよ！
われらが故郷、われらが祖国！
汝の子すべての中に流れる
真の愛国心
輝ける心をもって
興隆する祖国を見守らん
真の北国
堅固にして自由なり！
遠く広くから、
おお、カナダよ
われらは汝を守りゆく
神よ、これからも
われらの大地を荘厳で自由に保ちたまえ
おお、カナダよ
われらは汝を守りゆく
おお、カナダよ
われらは汝を守りゆく

「カナダの国歌」
(参考訳：カナダ大使館 広報文化部)

80 同上，42 ページ。

を歌った時、座っていた人々が立ち上がって聞いてくれました。私はその時、「君が代」が流されたときに日本人は、果たしてどの位の人々が立ち上がって聞くかが心配になったと同時に、カナダの人々の愛国心に感動しました⁸¹。

このように感じるのは、すごく当然であり、素直な気持ちであろう。ところが大きな文脈で考える時、日本では国旗と国歌をめぐる世論は統一されてはおらず、公立校の校長がその矛盾を抱えて自らの命を断たねばならなかったと言った状況がある。国旗については、既に上に述べたが、国歌に関しても、“O Canada!”⁸²と「君が代」の歌詞を比較するだけで、両者は何に価値を置こうとしているのかが明白であり、問題は決して簡単ではないのである。しかし、以上のように感じることを切っ掛けとして、カナダの社会のことを考え、日本の社会のことを考えることになるだろう。

K. カナダに触れて、生徒が変わる

上に見てきたように、39人の中学生たちは、様々な点で影響を受けている。そして、もしカナダの人たちに出会わなかったら、決して起こり得なかった変化が、自らの中に起きているのをハッキリと意識して感じている。カナダでの体験が、いかに彼らに影響を与えたかは、次の言葉に明確に現れている。

私たちは、これからは自信を持って外国人とコミュニケーションができると思います。早速、新学期からはALTの先生に積極的に話しかけるつもりです。そして、カナダでの素晴らしい体験を多くの人たちへ

81 同上、26 ページ。

82 カナダ大使館のホームページを参照。

http://www.canadanet.or.jp/about/faq_anthem.shtml

広めます。私自身は、この体験を活かし将来いろいろな国に渡り、視野を広めたいです。それと、この貴重なチャンスを与えて下さった区の方々への感謝の気持ちを忘れません。——来年の留学生に望むこと——それは、臆病にならないことです。前向きでないと、心から楽しむ事ができない。また、積極的に意思を伝えようとしないと、中途半端なコミュニケーションで終わってしまうからです。はっきり言って、発音が悪くても、文法が正しくなくても、ジェスチャーや辞書を見せながらでも言いたいことは伝わります。大切なのは、伝えようとする気持ちなのだという事を、私は留学中に分かりました⁸³。

ここには、一つの事を成し遂げたという自信と達成感が感じられる。そして、解団式当日の様子を生徒の一人は次のように表現している。

みんなの顔は輝いていました。達成感に満ちた顔でした。カナダの全てが、僕たちを大きく成長させる糧になりました。きっとこの経験は、人生においても、大きな意味を持つと思います⁸⁴。

この言葉が端的に現しているように、まぎれもなく、このプログラムは、「若者たちに夢」を与えていると同時に、将来のリーダーを作り出すのに大きな役割を果たしていると言えるだろう。

おわりに

本論で述べてきたところから、とりわけ重要ないくつかの特徴を指摘することができる。それらは、姉妹都市活動の大枠に関するものと、相互交流から生じる影響についての二つに大別される。

83 同上, 49 ページ。

84 同上, 47 ページ。

まず第一に、自治体同士の交流が不活発になった理由は、江東区側とサレー側が姉妹都市関係に求めるものが異なっていたということについては触れた通りである。江東区とサレーの場合は、江東区の本場が世界から木材を輸入して木材加工業が成り立っていた時期には経済的相互関係が存在したのだろうが、本場の木材加工業が輸入品に押されて衰退してしまうと、そこで経済的な関係が存在しなくなり、儀礼的な関係のみになったということである。日本とカナダとの姉妹都市関係では、日本側としては教育・文化分野での交流を期待するが、カナダ側としては経済的な利益を姉妹都市交流に期待する傾向がある。一般的に日本側は国際担当の部署が関与することが多く、カナダ側は経済開発部門が担当する場合がかなりある。このような担当部署の違いからも、両者が何を期待しているのかが現れていると言えよう。江東区とサレー市の場合は、まさにこのような典型的な例の一つであると言っても良いであろう。

第二に、今までの姉妹都市関係とは異なり、これからの一つのモデルを示唆するものではないかと思われる点である。上にも触れたように、江東区とサレー市との間には「儀礼的な関係」があるだけである。普通は、このような状態になると「休眠状態」となり、何ら見るべき活動が行われないうことになる。ところが、江東区の場合には、簡単にしか触れることが出来なかったが、個人のレベルでサレー市との関係に活発に関わっている人物の存在がある。さらに、行政主導によるものでもなく、また行政の支援も受けていないという意味で、「民間分野」に位置付けられている第三大島小学校とサリバン小学校との関係である。「総合学習」と「国際理解」という時代の流れにそって出てきたプロジェクトであるが、これは非常にユニークな活動である。今までの日本には見られなかった動きであり、一つの先駆的なモデルを示唆するものであろう。このプロジェクトが今後どのように発展していくかは、運営主体の責任者である学校長の判断と担当教員の資質にかかっていると言えよう。

第三に、江東区教育委員会が行っている中学生の短期留学も、姉妹都市の枠組みから考えれば変則的である。変則的であるが、それなりの役割と

新たな関係の萌芽を含んでいる。普通は、姉妹都市提携をすると、両方の自治体の学校同士が相互訪問をすることが多い。江東区の短期留学の場合は、順序が逆で、姉妹都市提携締結前に短期研修が始まり、研修場所も姉妹都市のサレー市ではなく、同じブリティッシュ・コロンビア州にありながらも姉妹都市ではないスクォミッシュという町である。サレー市との関係で言えば、4回目の派遣からサレー市の表敬訪問を行っているという具合である。しかしながら、江東区の英語教育の一環として見れば、筋が通っていると言える。上でも触れたように、ALTの選抜・派遣もブリティッシュ・カウンシルを通じて行っている。非常にユニークであると同時に、明確な教育理念を持っていることが感じられる。姉妹都市関係の枠組みの中では、質の良いALTを継続して提供していくことは、恐らく困難なことであろう。研修地のスクォミッシュは、治安が良くて町長自身が先頭に立って歓迎してくれ、満足のいく夏期研修プログラムがあり、プログラムの趣旨を理解して協力してくれる良質なホームステイが存在しているようである。ホームステイ自体がビジネスになっている今日では、なかなか昔ながらのホームステイ環境を提供してくれる場所は少ないであろう。サレー市との関係で言えば、現在の表敬訪問を維持・強化するなり、あるいはサレー市より学生を受け入れることも考えられる。いずれにせよ、現在の表敬訪問でも、「選ばれた生徒たち」に、本論で触れたようにカナダの公式の場に触れさせることは、それだけでも意義の大きいことである。

第四に、第三大島小学校とサリバン小学校との相互訪問の影響については本論で詳しく述べた通りである。カナダ人に直接接することにより、教師たちは「教師の目」を通して、カナダと日本との様々な違いを観察している。例えば、ホームステイを通じて、また学校という場で、日本とカナダの子供たちの立ち居振る舞いや行動の違いを通じて、ある場合には、カナダ社会の価値観を見て取り、日本の子供や社会を客観的に見るという非常に得難い体験をしている。まさに、百聞は一見にしかず、である。自分達の目の前に現れたサリバン小学校の子供たちに接して、「大人とも応対ができ」、社会性を身につけた子供の存在を実感し、そこにカナダ社会の価値

観とカナダの家庭での躰の影響を感じるのである。それは、同時に現場の教師たちに、われわれ日本人が「すべき事をしてこなかった」という事実を目を向けさせることになり、同時に「何をすべきなのか」ということを考えさせることになるのである。

第五に、教育委員会による短期留学のプログラムも、上記に述べたように非常に大きな影響を若者たちに与えている。中学生たちはホームステイに入り、カナダ人たちの普段の生活に触れ、日本国内では想像したこともなく考えたこともないような体験をしている。もちろん、英語に自信ができるということも重要なことであるが、それ以上の大きなものを感じ、そして身につけてきている。その中でも最も重要なことは、カナダ人の日常生活の中に、「他者と関わっていきこう」とする態度を発見し、そのような姿勢を学ぼうとしている点である。「他者に関わっていく」という事は、現在、日本の多くの大人にも欠如しているし、大人たちが子供たちに教えてこなかったことでもある。それを、江東区の子供たちは、カナダ人の家庭で「教えられるともなく」教わったのである。そして、そのような姿勢を自らが身につけるには、「自分たち自身が変わらなければならない」と明確に自覚するようになったのであるから、これは非常に大きな影響だと言わざるを得ない。

最後に、江東区のケースの場合、従来の姉妹都市関係の枠組みで見ると、否定的な取らえ方になり、今回の調査も行われなかったであろう。ところが、上記の第二と第三の点との関連から考えると異なった構図が見えてくる。つまり、第二と第三の点を考慮に入れると、行政主導の下に一元的に動くという従来のタイプとは明らかに異なっているが、決して否定的に捉える事はできないということである。否、むしろ、新たなタイプの萌芽を見て取ることができる。それは、行政主導ではなく、イニシャチブを取る主体がいくつもあっても良いのではないかということ、いや、その方がむしろ活発な活動が展開されるのではないかということである。そして、相手先も、サレーもあり、スクォミッシュもあって良いのではないか、ということである。大きな枠組みの中で考えれば、スクォミッシュとサレー

市を結び付ける役割を果たせるかも知れない。さらに、スクォミッシュは、2003年11月3日に静岡県清水町と姉妹提携をしているので⁸⁵、スクォミッシュ・清水町・江東区・サレーと行き来が起こる可能性もある。お互いに縁がなかった者が繋がり刺激しあって、今までにないものが生まれてくる可能性があるだろう。姉妹都市を切っ掛けとして、姉妹都市の枠を超えた関係がカナダ国内の今までに関係のなかった都市同士、そして同様に日本国内の今までに関係のなかった都市同士の間にも生じることも考えられるだろう。

資 料

- ・江東区教育委員会「江東区立中学校生徒海外短期留学——昭和62年度～平成13年度（第15回）実施経過」2002年9月10日。
- ・_____「中学生海外短期留学実施要綱(江東区立中学校生徒海外短期留学実施要綱)」, 1987年4月1日。
- ・_____「平成14年度江東区立中学生海外短期留学留学生徒アンケート集計」, 2002年。
- ・_____『平成14年度江東区立中学校生徒海外短期留学報告書（第16回）』, 2002年11月。
- ・江東区国際友好連絡会「参加団体一覧」, 2002年10月。
- ・江東区役所区民部地域振興課区民交流係「サレー市の概要」, 2002年12月。
- ・_____「姉妹都市交流経過一覧」, 2002年。
- ・_____「姉妹都市交流の現状」2002年12月。
- ・「東京都江東区国際交流活動推進助成要綱」平成4年8月10日江総総発第169号。
- ・「東京都江東区国際交流活動推進助成要綱」1992年8月10日。

参考文献

- ・市岡政夫『自治体外交』日本経済評論社, 2000年。
- ・伊藤善市他編『自治体の国際化政策と地域活性化』学陽書房, 1988年。

85 カナダ大使館ホームページ, 前掲。

- ・井上真蔵「異文化接触とコミュニケーション」、『北海道から』（特集：国際交流の光と影）北海学園大学，1985。
- ・_____「国際化の一側面——北海道とカナダとの姉妹都市関係について——」、『北見大学論集』北海学園北見大学，1993年。
- ・島袋邦・比嘉良充編『地域からの国際交流』研文出版，1986年。
- ・徳久球雄編『国際化の地理学』学文社，1998年。

インターネットのサイト

- ・ <http://www.koto.ed.jp/gakkoukyouikubu/09/kanada2.htm/>
(江東区立中学校生徒海外短期留学に関して：江東区教育委員会ホームページ)
- ・ <http://www.koto.ed.jp/3dai-sho/Canada/SULLIVAN%20PROJECT.htm/>
(サンダイ・サリバンプロジェクト：江東区立第三小学校ホームページ)
- ・ <http://www.koto.ed.jp/3dai-sho/Canada/2002/report.htm#2/>
(「サリバンレポート」：江東区立第三小学校ホームページ)
- ・ <http://www.city.surrey.bc.ca/Inside+City+Hall/City+Departments/Managers/Economic+Development/default.htm/>
(「経済開発局」に関して：サレー市のホームページ)
- ・ <http://www.city.koto.tokyo.jp/>
(江東区役所ホームページ)
- ・ http://www.canadanet.or.jp/p_c/sistercity.shtml/
(「カナダ・日本姉妹都市リスト」カナダ大使館ホームページ)